研究報告

出産準備教室ボランティアにおける看護学生の経験

Nursing Students' Experiences as Volunteers within the Childbirth Classroom

藤好 貴子 * Takako Fujiyoshi　森谷 由美子 ** Yumiko Moriya　田出 美紀 * Miki Taide
福澤 雪子 * Yukiko Fukuzawa　椎葉 美千代 * Michiyo Shiiba　中西 真美子 *** Mamiko Nakanishi

要　旨

〔目的〕出産準備教室ボランティアにおける看護学生の経験の内容を明らかにすることを目的とした。

〔方法〕出産準備教室の学生ボランティアで、2回以上ボランティアを経験した学生を研究対象として半構造化面接を行い、2年生から4年生計10名のデータを質的帰納的に分析した。

〔結果〕出産準備教室における学生ボランティアの経験として［青年としての目的意識］［看護学生としての目的意識］、［実施中の自己洞察］、［実施評価と意味づけ］、［未熟さを補うための積極的学習行動］、［学習意欲の向上］、［キャリア意識の形成］、［家族形成期にある対象の理解］、［結婚や母になることへの憧れ］の9のカテゴリーが生成された

〔考察〕教室を企画運営する教員は、動機など学生個々の背景を理解し、活動の振り返りの機会の定期的開催や学生の経験の解釈過程での思考整理の支援を、学生の自主性を尊重しながら行う必要がある。特に今回の出産準備教室は妊婦とその家族が対象であり、各学生に応じた経験の解釈ができるように支援していくことが必要である。そして、この支援はボランティア当日だけのものではなく、学生の受け入れから教室終了後といった教室企画が繰り返される中で、長期的支援体制として整えていくことが求められる。

キーワード：出産準備教室、ボランティア、経験、看護学生

Abstract

〔Purpose〕The purpose of this study is to illuminate the experiences of nursing student volunteers within the childbirth education classroom.

〔Methods〕The subjects were ten students from second to fourth year of university who had volunteered at two or more childbirth classes. Data were collected through semi-structured interviews and analyzed using qualitative inductive methods.

〔Results〕After data analysis, the following nine categories were extracted from the data: sense of purpose as a young person, sense of purpose as a nursing student, practical self-insight, practical evaluation and meaning-making, active learning to compensate for immaturity, increased motivation to learn, formation of career awareness, understanding of people building a family, and aspirations of marriage and motherhood.

〔Considerations〕It is important that the teacher organizing and administrating the classroom understands the background of student volunteers, including their motives, while respecting their independence. Student volunteers need regular opportunities to reflect on the activities and support for processing the experience and rearranging their thoughts. Since this childbirth class is for expectant mothers and their families, support is needed so that each student volunteer can understand the experience. A long-term support system needs to be established to support student volunteers not just on a childbirth class day, but from the day they volunteer until after the class is conducted as part of the repeated planning of these classes.

Key Words : Childbirth Classroom, Volunteer, experience, Nursing Student

* 福岡女学院看護大学　** 福岡女学院大学　*** 独立行政法人国立病院機構九州医療センター附属福岡看護助産学校

Ⅰ．緒言

A 大学の母性小児看護学領域では、B 市の保健師と母子保健活動の情報交換を行い、2014 年 4 月より官学連携事業「妊娠後期すこやか教室」(以下、出産準備教室とする）の企画に取り組んでいる。これは妊娠後期の妊婦とその家族を対象とした出産準備教室の取り組みである。

この出産準備教室運営の中で、看護学生ボランティアを募集することとなった。ボランティアは登録制とし、年間に複数回の参加の機会が持てるように企画した。出産準備教室では事前の学生ボランティア養成講座（以下、養成講座とする）が企画されており、そこでの学習内容は実際のボランティア活動の中で生かされていく。そして、ボランティア参加時は妊婦とその家族、託児対象の子どもたちと直接触れ合う機会となる。ボランティア活動が様々な面で学生の学習の場となることは近年報告されており、中でも看護学生が健康や医療に関するボランティア活動から得る経験は人間性の育成だけでなく、看護教育としても効果があることが報告されている。それらの報告によれば看護学生は、対象者である人や地域社会への理解の深まりや看護知識や技術、自身の看護観や将来の選択を学びとして得ていた（香春 , 田代ら 2005; 桝本 , 池田 , 2010)。このようにボランティアは活動の結果から様々な成果を得ることができるとされる。しかし、ボランティアは自発性・主体性を特徴とする（田中 , 廣瀬 , 2013, p. 5）ため、その経験は看護学生各自で多岐にわたる可能性がある。これまでの報告には出産準備教室ボランティアの看護学生の活動に関する報告はなく、看護学生が出産準備教室ボランティアの場で何を経験しているのか、その経験の内容に着目することは意義があることと思われる。そのため、本研究では出産準備教室ボランティアにおける看護学生の経験の内容を明らかにし、経験の様相とボランティア活動における看護学生への支援を考察する。

本論文では用語として「体験」ではなく「経験」を用いた。「経験」は人間と環境との関連の仕方やその成果の総体を意味し（下中 , 1992, p. 391)、人々が何らかの現実を自分のものとして分かろうとする一つの認識様式であるとされる（教育思想史学会 , 2012, p.236)。一方、「体験」は個々の主観の中に直接的に見いだせる意識内容、意識過程であり、経験とくらべて個々の主観に属するものとして特殊的、人格的であり、いまだに知性による加工、普遍化を経ていない点で客観性に乏しく、具体的、情意的であるとされる（下中 , 1992, p. 888)。出産準備教室における看護学生は、活動の中で体験を経験へと転換することができると考え、本研究では体験のきっかけとなる意識である出産準備教室ボランティア参加の動機から、ボランティア参加後の行動の変化までを経験として着目した。

Ⅱ．用語の定義

「経験」: 出産準備教室ボランティアにおいて、周囲との相互作用の体験から認識した成果。

Ⅲ．方法

1．研究デザイン

本研究は半構造化面接により、出産準備教室ボランティアにおける看護学生の経験を、語りから明らかにしていく質的帰納的研究デザインである。

2．ボランティア活動の実態

1）出産準備教室開催に向けた企画運営

出産準備教室は2ヶ月に1回､奇数月に開催され、出産に向けての準備や出産の経過に関する講話、リラックス法・呼吸法の体験、沐浴演習、教室参加者の交流会、託児が企画された。その中で看護学生ボランティアは運営メンバーの一員として役割を持ち、教室に参加した妊婦とその家族への教育を教員と一緒にサポートすることとなった。また、養成講座や妊婦・家族と関わる経験を通して、看護学生が妊婦と家族に対する理解を深め、母子保健活動の企画・運営の実際を経験することが出来る機会として企画が進められた。看護学生ボランティア募集登録は通年とするが、養成講座の開催にあわせて 3 月と 7 月に、A 大学全学生対象に学内メールおよび掲示でメンバー募集を周知した。メンバーは 2015 年 5 月現在、4 年生 12 名、3 年生 23 名、2 年生 9 名の計 44 名が在籍していた。

2）出産準備教室ボランティア養成講座

養成講座はBasic1･2･3とAdvanceの計4回で構成されており、原則ボランティア活動前にBasic講座を受講することとした。各講座に目標を設定し、講義演習形式で教員が指導を行った。Basic1では出産準備教室開催の目的と意義を理解すること、妊産婦のイメージができ、スタッフの一員としての関わりについて考えることが出来ることを目標にした。Basic2では新生児の身体と機能のイメージができ、沐浴を行うことができることを目標とした。Basic3では託児の対象である幼児期の成長発達の特徴と安全管理について理解し、環境を整えることができることを目標とした。Advance講座は希望した看護学生を対象とし、沐浴デモンストレーションの企画と指導案の作成をすることを目標とした。

3）出産準備教室開催時とその後の活動

養成講座を終了した登録メンバーの中から毎回10名ほどが、交替でボランティアに参加した。事前準備として会場設営を教員と共に行い、季節を意識した飾りつけや演習物品の準備を行った。託児の部屋は子どもの発達段階に合わせて、安全で子どもの好む部屋を準備した。当日は受付、会場内外の誘導、講話・呼吸法体験・リラックス法体験・沐浴演習のサポート、出産準備教室参加者同士の交流会参加、託児、終了後の片付けを教員と共に行った。また、後日に交流会として茶話会を企画し、看護学生の振り返りの場を設定した。この茶話会は、看護学生が自分たちで主体的に振り返ることを目的とした会であり、教員は場の設定と、当日の進行状況のサポートを行い、振り返りへの積極的な介入は行わなかった。

3．研究対象

出産準備教室ボランティアのA大学に所属する看護学生で養成講座終了後、ボランティアを2回以上経験した看護学生である。なお、本研究ではボランティア参加が初回の看護学生はその活動の中で体験を経験へと転換するには限界があると考え、2回以上経験した看護学生を対象とした。

4．データ収集

データ収集方法は半構造化面接法によるインタビューである。データ収集期間は2015年7月から9月であった。調査内容は対象者の基本属性として学年、年齢、出産経験、キャリア志望（助産師、小児科看護師に将来進路を希望しているのか）と出産準備教室における経験のインタビューである。インタビューガイドを以下に示す。

1）インタビューガイド

(1) 出産準備教室の参加動機
(2)「このボランティアで印象に残っていることはどのようなことですか」で質問を開始する。
(3) このボランティア活動で自分自身の変化があるか。（看護の知識･技術、職業意識、人間性、親性、地域社会への理解など）
(4) なぜそう思えるようになったのか。
(5) そこにはどのような人が関わっていたのか。
(6) その変化を途中で止めなければならないような事があったか。
(7) ボランティアを始める前と現在では違いがあるか。

5．分析方法

本研究では出産準備教室ボランティアにおける看護学生の経験内容について質的帰納的に分析検討を行った。はじめにインタビューで得られた録音データを逐語録に起こし、繰り返し読み込んだ。次に看護学生の経験内容によって、文脈と語りの意味に注目しながらデータを抜き出し、意味を解釈しながらそれぞれの内容を抽出した。その後、抽出された内容同士を共通点や相違点により比較、分類し、サブカテゴリーを抽出、カテゴリーとして統合した。また、カテゴリーはその内容により複数の局面に分けた。分析の過程では、分析の信憑性、妥当性を高めるために、母性・小児看護学専門領域の複数の研究メンバーで分析を行った。また、共同研究者以外の質的研究経験が豊富な研究者にサブカテゴリーやカテゴリーを提示し、確認、検討、修正を行った。対象者の基本属性に関する項目は記述統計を行った。

6．倫理的配慮

2015年6月に44名のボランティア登録学生を対象とした研究の説明会を実施し、研究依頼を行っ

た。なお、説明会に参加できなかった看護学生には、後日個別に説明を行った。看護学生へ、研究への参加は自由意志であり同意した後もいつでも同意を撤回できること、撤回を直接伝えることに抵抗がある場合は文章による要請が可能なこと、収集したデータは研究以外に使用しないこと、研究終了後は直ちにデータを破棄すること、データから個人を特定できることの無いように配慮することを研究参加者に十分伝えた。また、収集したデータは個人を評価するものではなく、授業や実習の指導や成績、今後のボランティア活動に影響しないことも伝えた。説明は口頭と書面で行った。

本研究は、教室を主宰する教員が所属する大学の看護学生を対象に行う研究であることから、看護学生に強制力が働く可能性がある。そのため、インタビュアーは研究者と別に設定し、研究協力者として教室運営および看護学担当以外の学内の教員にインタビューの依頼をした。研究者は研究の主旨を研究参加者へ説明し、研究に参加の意思を示す看護学生は、説明後に学内に設置した提出用の箱に同意書を提出してもらった。その後、同意書を提出した看護学生とインタビュアー間で日程が決められ、インタビューが実施された。インタビュー時に看護学生にIDを設定し、研究者が研究参加者とIDの一致が特定できないようにした。インタビューはプライバシーの保護が出来る個室にて1対1で行われ、承諾を得た後にICレコーダーに録音され、録音データによる逐語録の作成は外部に依頼した。なお、本研究は福岡女学院看護大学研究倫理委員会による審査・承認を得て実施した。〔審査No. 15-5〕

Ⅳ. 結果

研究協力者の属性として、本研究に参加した看護学生は2年生1名、3年生3名、4年生6名で、平均年齢は21.5 ± 2.5歳の出産経験のない女性であった。現時点での進路希望は、助産師2名、看護師5名（うち1名小児科希望）、保健師1名、助産師または看護師（小児科）1名、保健師または看護師1名であった。インタビュー回数は各1回、インタビュー時間は25分～39分(平均29分)であった。

分析から、49のサブカテゴリー、9のカテゴリーが抽出され、カテゴリーの内容により3つの局面に分けられた（表1)。以下本文中のサブカテゴリーは【　】、カテゴリーは［　］、研究協力者の語りは「　」、語りの中の会話部分は『　』で示す。なお、（　）内は文脈が途切れないように研究者が補った言葉の表記である。

表1　出産準備教室ボランティアにおける看護学生の経験

	カテゴリー	サブカテゴリー
参加動機	青年としての目的意識	活動への興味
		きっかけとなる友人からの誘い
		妊婦や子どもと関われる期待
		将来母となることを意識
		コミュニケーション能力獲得機会への期待
	看護学生としての目的意識	将来の職業を意識
		母性・小児看護学への学びの期待
学習行動	活動中の自己洞察	参加当初の不安
		うまくいかない実施
		医療知識の大切さの確認
		参加しやすい支援体制
		講習会・講義の知識の活用
		できることから実践
		試行錯誤
		実習でない安心感
		積極的になれない自分
	実施評価と意味付け	自分の学ぶ姿勢の見直し
		役に立てたという満足感
		自分自身のかかわりを分析
		授業と実践のつながりの理解
		教室企画への理解
		後輩を育成
		コミュニケーション能力の成長を実感
		伝えたい価値ある経験という認識
	未熟さを補うための積極的学習行動	先生の動きを観察する
		安心できる先生の存在
		実践モデルとなる先生
		先輩の動きを分析
		憧れの先輩の存在
		役立つ先輩のアドバイス
		同級生との協力
		仲間からの学び
		学年を超えた関係の構築
		予習してからの参加
		実習の経験を活用
	学習意欲の向上	興味関心の深まり
		授業・実習の予習となる
		母親となる予習
	キャリア意識の形成	医療者としての視点の意識
		職業将来像の具現化
家族観	家族形成期にある対象の理解	母親像の明確化
		新しい命の実感
		妊娠・出産への幸せな思いへの共感
		現実の育児・出産についての発見
		改めて注目する父親像
		きょうだい児からの学び
		日常での妊婦を労わる行動の変化
	結婚や母になることへの憧れ	将来母となるイメージ
		幸せな夫婦の姿への憧れ

1. 参加動機

看護学生は出産準備教室の参加動機として［青年としての目的意識］［看護学生としての目的意識］を持っていた。

1）［青年としての目的意識］

看護学生は「教室がありますよっていうメールが来たときに、何かどんなのだろうっていう、ちょっとした興味から」と教室での【活動への興味】や、【きっかけとなる友人からの誘い】、「子どもが単純に好きだったし、人とかかわることが好きだから」と【妊婦や子どもと関われる期待】をしていた。また、「自分が経験するであろうことだったので、いい機会になると思って」と【将来母となることを意識】し、「すごい人見知りが強くて、それで接客業とかやってみてはいるんですけど、なかなか直らなくてその一つの手段として」と青年としての【コミュニケーション能力獲得機会への期待】も意識していた。

2）［看護学生としての目的意識］

「保健師になりたくて、母子保健、両親教室とかに興味があって」と看護師、保健師、助産師といった【将来の職業を意識】していた。また、「元々母性看護学の苦手意識が強くて、興味が持てるかなと思ったのと、実習でも役に立つかな」と教室参加の動機が講義や実習に役立つのではという【母性・小児看護学への学びの期待】を意識していた。

2. 学習行動

看護学生はボランティア活動をとおして、［実施中の自己洞察］、［実施評価と意味づけ］、［未熟さを補うための積極的学習行動］、［学習意欲の向上］、［キャリア意識の形成］を経験していた。

1）［活動中の自己洞察］

ボランティア活動の中で「最初は授業や人形でしかやったことがないので、（省略）不安のほうが大きくて、自信がない部分があった」と妊婦と接する経験、知識のなさから【参加当初の不安】があった。「医療用語が多くて伝わらなかった。自分の中では普通の言葉だけど、初産婦さんとかは、まったく分からない状態」と【うまくいかない実施】も経験していた。妊婦や家族に関わるにあたり【医療知識の大切さの確認】や事前講座など【参加しやすい支援体制】も経験していた。その中で【講習会・講義の知識の活用】や「ちょっと困っているのかなというふうな感じで感じたら、どこか分からないことがありますかとか積極的に聞く」と声をかけるなど、自分が【できることから実践】を行っていた。そして、「（妊婦が）スリッパと靴をはき替えるとかでも負担なのかな。先生とも相談しながらまず1個椅子を置いておく」と自分なりに考え【試行錯誤】をしながら対応を行っていた。そこでは、「実習独特の緊迫感みたいなものがボランティアではあんまりなかった気がするので、伸び伸びやれた」と【実習でない安心感】を感じていた。しかし、逆に「実習では受け持ちだったから、病室へ行ったりできたと思うんですけど（ボランティア活動だと）気遣いとかはできても、話しかけたいけど話しかけられない」と、実習時にある責任やその場のみで達成しなければならない課題ではないという認識が行動に表れたことや、妊婦と接する経験がない不安から【積極的になれない自分】もあった。

2）［実施評価と意味づけ］

ボランティア活動を行う中で学生は、出産準備教室参加者の真剣に取り組む姿から【自分の学ぶ姿勢の見直し】や、参加者の感謝の言葉から【役に立てたという満足感】を感じていた。その中で、【自分自身のかかわりを分析】したり、「授業で学んだことが、実践というか、実際にはこういうふうに（妊娠期の変化が）現れるんだっていうのが経過として分かった」と【授業と実践のつながりの理解】をしていた。その他に広報の写真撮影を担当した学生は、「ご夫婦が一緒に協力している姿を、なるべく撮ろうと思いました。そういうふうに活動しているところをポスターに載せたら、将来そういうふうにしてくれる人が来るのかな」と【教室企画への理解】を示していた。また、「自分が行動するだけじゃなく、ちゃんとチームにも伝えるっていう、先輩として『こういうところ見てね』と下に伝えるのが大事」と【後輩を育成】することや、ボランティアに参加する前よりも【コミュニケーション能力の成長を実感】する経験をしていた。「母性（看護）が好きな人もいいですけど、嫌いな人に経験してもらいたい」「普段の授業とかではできないような経験をさせてもらっている」と妊娠後期の出産準備教室が【伝えたい価値ある経験という認識】もしていた。

3）［未熟さを補うための積極的学習行動］

活動の中で学生は教員に注目し、どのように参加者と接しているのか【先生の動きを観察する】行動の選択や、「（教員が）学生に教えるときにもすごく優しい。ボランティアだから、授業ではないっていうのもあるんですけど」と活動の中で【安心できる先生の存在】を感じていた。そして、「（教員の参加者へのかかわりを）近くで見れたので、そういう影響が積み重なって最終的に自分の大きな変化に」と専門職として母性看護の【実践モデルとなる先生】と教員を認識していた。また、「（妊婦に）どういう話題を話したら盛り上がるのかが分からないけど、先輩たちの関わり見ていたら、こういうこと聞いたら話が広がっていくんだって」と【先輩の動きを分析】し、ボランティア活動の中で【憧れの先輩の存在】や、【役立つ先輩のアドバイス】を感じていた。同級生には「参加した友だちと沐浴指導のときにカンファレンスみたいになって、こっちがいいんじゃないかとか、これはどうかとか」と身近な存在の【同級生との協力】を行っていた。その他に「準備の段階からしっかり来て、できないことはちゃんと自分たちでも勉強してという姿を見て、自分はこういうふうにしないといけないっていうのを後輩から学びました」と学年を超えた【仲間からの学び】や、出産準備教室やその後の茶話会にて「縦のつながりだったり横のつながりだったりができたので」と【学年を超えた関係の構築】を経験していた。知識の補充として【予習してからの参加】や「実際の赤ちゃんはもっと柔らかいとか、実習で学んだこととかを言ってあげる」と【実習の経験を活用】することも行っていた。

4）［学習意欲の向上］

看護学生はボランティア活動を通して、より【興味関心の深まり】を感じていた。授業中では「妊娠期ってイメージしにくい部分ではあるけど、教室に来ていた妊婦さんたちを思い出して」、「実習の時に、すごく話せたんです妊婦さんと。（教室で）どんなことをお母さんが話しているのかっていうのを聞いていたから」と【授業・実習の予習となる】経験をしていた。また、「教室を通して自分はこういうふうに将来したいなっていうか、バースプランじゃないですけど」と【母親となる予習】の経験をしていた。

5）［キャリア意識の形成］

看護学生は「教室を受けているときも、きつくないかとか対象者の体調をよく見ながら、看護師として動くみたいなことを学んだ」「チームで動くみたいな、学生で協力して１個仕事をするみたいなもの、動き方の能力みたいなものを養われた」と医療者としての対象者の体調管理やチーム医療のメンバーとしての【医療者としての視点の意識】をするようになっていた。また、「教室に関わる前は助産師になりたいと思ったこともなかったし、母子保健とか興味もなくって、ただ子どもが好きだけだったけど、実際に関わっていく中で助産師になりたいと」と【職業将来像の具現化】をしていた。

3．家族観

看護学生はボランティア活動を通して、［家族形成期にある対象の理解］と［結婚や母になることへの憧れ］を経験していた。

1）［家族形成期にある対象の理解］

看護学生は「実際に妊婦さんと話して（母親像が）はっきりした感じ。こうやって産んで、こんなことを病院で教わって育てる」と【母親像の明確化】を行っていた。また、「おなかを触らせてもらったのが一番。蹴ったりとか、『あ、ここにいるな』みたいなのが分かったときは、楽しかった」とリアルな【新しい命の実感】や【妊娠・出産への幸せな思いへの共感】をしていた。そして、「今までは赤ちゃん見ても、『ああ、かわいいなあ』とかで終わって、妊娠、妊婦さんの苦労とか大変なことまで考えてなかった」と【現実の育児・出産についての発見】をしていた。妊婦以外の家族に関しては、「奥さんより旦那さんの方が沐浴頑張っていて、そういうところが普段は見れないから、すごく意外」、「仕事と子どもが中心の生活のバランスのとり方とかいろいろ不安なんだと思って。マタニティーブルーみたいなお父さんの不安って考えたことなかった」と【改めて注目する父親像】を感じていた。また、「託児所も一から造る。子どもが危なくないように、でも楽しくなるような雰囲気を出す」「（託児室で）子ども達の成長の違いっていうものも勉強になりました」と【きょうだい児からの学び】を経験していた。その他に、「妊

婦さんに自然に目が行くようになりました。電車とかきついだろうから、すぐ席を替わらなきゃとか、かばんに付いているマタニティーマークとかすぐ見つけられたり」と、【日常での妊婦を労わる行動の変化】も経験していた。

2）［結婚や母になることへの憧れ］

看護学生は、「子どもが欲しいなって思いました。自分の子どものことだったらこんなに真剣にできるんだ」と幸せな【将来母となるイメージ】や、「奥さんと旦那さんが、仲良さそうにしているところを見ると家族っていいなっていうか、自分も将来そうなりたい」と【幸せな夫婦の姿への憧れ】を感じていた。

V．考察

1．出産準備教室ボランティアにおける看護学生の経験の様相と特徴

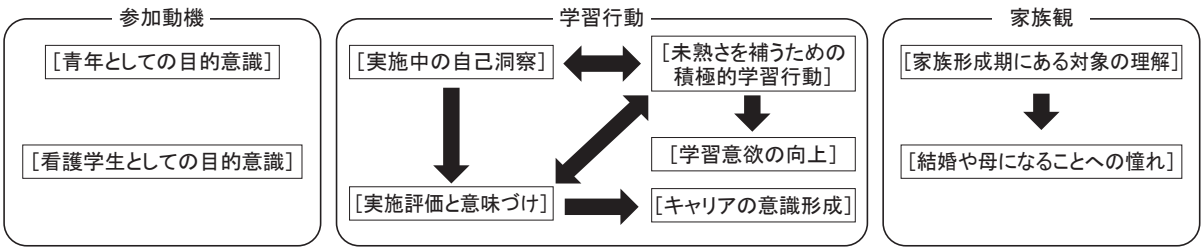
今回の結果である抽出されたサブカテゴリーとカテゴリーを基に、カテゴリー間の関係を検討し、その様相を図式化した(図1)。出産準備教室ボランティアの看護学生は、参加動機、学習行動、家族観に関する３つの局面の経験をしていた。

出産準備教室ボランティアの参加動機として看護学生は、医療分野に直接関係しない［青年としての目的意識］と、［看護学生としての目的意識］を持っていた。今回の研究参加者である看護学生は全員女性であり、今回のボランティア活動が近い将来女性として自分自身が経験する可能性がある妊娠・出産という出来事であることや、講義・演習や就職といった看護学生として習得すべき目標や将来選択する職業の専門性に関連していることが参加への目的意識の根底にあると思われる。しかし、活動への関心の高さだけではなく、中には漠然とした活動への興味や友人からの誘いといった動機もあり、様々な目的意識で参加している看護学生が活動の場に存在していることが窺えた。

学習行動において学生はボランティア活動の［実施中の自己洞察］から［実施評価と意味付け］を行っており、その自身の振り返りの経験は［未熟さを補うための積極的学習行動］と相互に経験を繰り返しながら、最終的にボランティア活動参加以前よりもより積極的な［学習意欲の向上］へと変化していたと考えられる。桝本、池田（2010）は看護大学生がボランティア活動を通して、自学自習のための知識や技能や、情報を自分なりに収集し処理するための知識や能力を獲得している可能性が高いことを報告している。今回のボランティアも看護学生にとって、自分の未熟さを理解し体験から経験へと解釈を深め、時に自分がこれまでに習得した看護の専門性の知識と技術を用いながら活動している。その中で自身の学習行動を変化させ、学習成果を基により積極的な学習意欲の向上を感じる経験となっていたのではないだろうか。また、そこには看護学生、教員、妊婦とその家族の相互作用が存在しており、時には看護学生同士の学年を超えた繋がりも学習行動の変化へ大きく影響していたと考えられる。そして、看護学生は学習行動の変化の中で［キャリア意識の形成］も経験していた。キャリアに関する経験において、ボランティア経験は他者との人間関係をもとにライフバランスや将来展望など将来への意欲・態度に関わり、勤労観の形成に寄与すると報告されている（河﨑 , 2010）。出産準備教室ボランティアでの経験は、実際に職業として選択する可能性のある内容であり、より具体的なキャリア意識へと繋がる機会となっていると思われる。

家族観においては、母親像の明確化など妊娠、出産に関する現実の認識を深め、妊婦を労わる行動の変化を含む［家族形成期にある対象の理解］

図1　出産準備教室における学生ボランティアの経験の様相



を通して［結婚や母になることへの憧れ］を持つ経験をしていたと考えられる。母性看護学や小児看護学では、ケア対象者の発達や生理学的変化といった特徴の理解が重要であり、看護学生にリアルな対象者の姿を伝えることが教員の課題である。近年の少子化といった社会現象は看護学生が妊婦や子どもに接する機会の減少と繋がっており、臨床実習に出るまで、このような対象者と接する機会のない看護学生も多い。ボランティアの経験は、妊娠期の困難さも含めたリアルな対象者の状況を知る貴重な学習の場となっている。そして川瀬（2010）によれば、ボランティア活動などによる子育て経験を持つ学生は高い親準備性を持っていることが認められたと報告している。自分自身が将来経験するかもしれない妊娠や新しい家族構築について、活動を通じて肯定的なイメージを持つことは、看護学生にとって子どもを慈しむ親性を育む機会にもなると思われる。

2．出産準備教室ボランティアにおける看護学生への支援

厚生労働省はボランティアの定義について、「一般的には「自発的な意志に基づき他人や社会に貢献する行為」を指してボランティア活動と言われており、活動の性格として「自主性（主体性）」「社会性（連帯性）」「無償性（無給性）」等があげられる。」と述べている（厚生労働省，2007）。出産準備教室ボランティアの参加は各看護学生の自主性により決められたものではあるが、参加動機の中には友人に誘われた、漠然とした興味があるといった動機が明確でない、これから活動の意義を見つけたいという看護学生も存在している。ボランティアの企画を行う教員は、看護学生が各自様々な動機を持って参加をしていることと、その個別の動機を尊重する必要がある。大学内は教員と学生といった立場が力関係として存在するときがある。ボランティアの最も基本となる性格である「自主性」が保たれるよう、勧誘方法や活動継続のサポートが必要であり、看護学生がメンバーの一員としてのびのびと活動ができることが望ましい。

ボランティア活動を通じての学びをより大きく、深いものにしていくためには活動に参加するだけでは十分でなく、事前学習や準備により知識や留意点をもったうえで活動に臨み、事後の振り返りによる学習内容や気づきの意識化をしていくことが求められるという（田中，廣瀬，2013, p.106）。看護学生は語りの中で、メンバー同士でボランティア活動中に、起こった出来事やその後の活動の改善について検討していたことを述べている。だがそれは、活動に熱心な一部の看護学生やボランティア活動時の一部の期間であり、継続して全員の看護学生が振り返りの機会を持つことは難しかった。そのため、全員が参加できる茶話会を教員が企画し実施した。その場では看護学生は自由に語り合いながら異なる学年間の交流の場ともなっていた。この企画は看護学生がボランティア活動中に行うことができない、落ち着いて自分の活動について考え、メンバーとの意見交換から活動の解釈を深め整理する機会となると思われる。しかし、看護学生同士だけでは振り返りや解釈の深まりが不十分な結果となってしまうことも考えられる。教員は、ボランティア活動の主体は看護学生であることを前提にしながらも、このような会の定期的開催、看護学生の経験の解釈課程での思考整理の支援を看護学生の自主性を尊重しながら行う必要がある。特に今回の出産準備教室は妊婦とその家族が対象であり、普段接する機会が少ないことや授業の進行状況から、事前に養成講座は行っているが学年により対象者の特徴や支援の理解に差が出てくると思われる。各看護学生に応じた経験の解釈ができるように支援していくことが必要である。そして、解釈の深まりによる成果は次のボランティア活動に活きてくる。この支援はボランティア当日だけのものではなく、看護学生の受け入れから出産準備教室終了後、そして教室企画が繰り返される中での経験の積み上げといった、長期的支援体制として整えていくことが求められる。

Ⅵ．結語

出産準備教室ボランティアにおける看護学生は、各自様々な動機でボランティア活動に参加しており、その活動の中で学習意欲の向上やキャリア意識の形成に繋がる学習行動と、家族観に関する体験を認識し、経験として成果にしていた。看護学生はボランティアにおいて多様な経験をしている。教

室を企画運営する教員は、その経験を看護学生が解釈し次の経験に活かすことができるように、動機といった背景を理解し、活動の振り返りの機会を定期的に設けることが必要である。ボランティア活動は自主的なものであり、その部分を尊重しながら、受け入れる側は看護学生が活動の場で力が発揮でき、その経験から学びを得ることができるよう支援体制を整える必要がある。

Ⅶ. 研究の限界と課題

本研究は1施設の調査であること、研究参加者の学年による人数の偏りが見られることから一般化には限界がある。今後は多施設での調査、各学年での経験の差の評価やそれに伴うボランティアの受け入れ・支援体制の検討が必要である。また、今回のインタビューで、出産準備教室ボランティアにおける経験の内容に変化がない看護学生はいなかった。ボランティアという自主性・自発性を特徴とする活動に参加する看護学生という特徴が、結果に影響を与えている可能性がある。今後は出産準備教室ボランティア活動の中で経験変化が認識できない学生にも焦点を当て、その経験を捉えることも課題である。

謝辞

本研究を行うにあたり、インタビューに参加協力して頂いた看護学生の皆様に深く感謝申し上げます。

付記

なお、本研究は日本看護学教育学会第26回学術集会で発表したものに加筆修正したものである。

文献

香春知永，田代順子，及川郁子他．(2005)．ヘルス・ボランティア活動をしている看護学生の学習ニーズと学習支援のあり方．聖路加看護学会誌，9 (1)，11-18.

河﨑智恵．(2010)．ライフキャリアの能力・態度に関する尺度構成の試み．キャリア教育研究，29 (1)，25-30.

川瀬隆千．(2010)．大学生の親準備性に関する研究．宮崎公立大学人文学部紀要，17 (1)，29-40.

厚生労働省．ボランティアについて．2017-10-5. http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/12/dl/s1203-5e_0001.pdf

教育思想史学会（編）．(2012)．教育思想事典．236, 勁草書房，東京．

桝本朋子，池田敏子．(2010)．看護大学生のボランティア活動における自己教育力に関わる学習効果－教育的支援であるグループワークでの発言内容の分析－．日本看護学教育学会誌，20 (1)，1-13.

下中弘（編）．(1992)．哲学事典．391. 888, 平凡社，東京．

田中雅文，廣瀬隆人（編著）．(2013)．ボランティア活動をデザインする．5. 106, 学文社，東京．